

## 【報告要旨集】

\*\*\*\*\*基調講演\*\*\*\*\*

陳 来幸 CHEN Laixing (兵庫県立大学)

帝国崩壊後の在日華僑と在日台湾人

Keynote Speech: Overseas Chinese and Taiwanese in Japan after the Fall of the Empire of Japan

司会：上田貴子 UEDA Takako (近畿大学)

日本帝国（臣）民であった日本に住む台湾人が、戦争の終結によって外国人となり、中華民国に帰属する「新」華僑となった。様々な段階を経て日本に定着した大陸出身の華僑もまた、戦争末期には友邦国民として日本政府によって協力を要請されたり、取り締まりの対象とされたりした側から、日本の敗戦とともに戦勝国民へと転換した。帝国のはざまを生きた在日華僑と在日台湾人のアイデンティティは複雑である。内戦の結果国民党が台湾に逃れて北京に共産党政府が誕生するという政治の帰結はさらに状況を複雑にした。在日華僑にとっての戦後は出身地、年齢による時代性、来日から数えた世代、言語文化の継承程度によっても受け止め方は様々であった。

(1) 戦後「華僑運動」を主導し、社会主義中国の誕生に共感を示したのは当時在日華僑の半数を占めた台湾人の内のインテリ層であり、中国共産党と日本共産党と直接的な関係が認められる留日華僑民主促進会（1948年10月成立）においても台湾人が中心的役割を果たした。

(2) 台湾に渡った国民政府は、冷戦構造が膠着するなか、在日台湾人を重用することなく、日本語ができる満州地域出身の外省人を工作員として日本に送り込んだ。生活破綻した台湾人を快く受け入れたのは北京政府であって、多くの台湾人が1950年代に大陸中国へと「帰国」する道を選んだ。

(3) 一方、壊滅的な打撃を被った戦前の国民党支部の再建を担い、政府機関に協力したのは、旧来からの国民党信奉者であった一部広東人や江浙グループに属する旧来からの華僑であり、多くの一般華僑は大勢が定まるまでは静観の姿勢であった。

以上のように、台湾人が台湾政府、大陸出身華僑が北京政府を支持するという単純な構図ではなく、脱日本化が進む戦後華僑社会においては極めて錯綜した政治的帰属意識が形成されたのである。

本報告では、台湾人商人としては比較的早い大正時代に神戸に移住して定着し、必然的に「左傾化」していった台北県出身の陳通とその家族の事績を紹介し、歴史を通貫する物語としてこれを描きなおしてみたい。

\*\*\*\*\*第I部会\*\*\*\*\*

「移動の経験は世代や境界をいかに『越える』のか」

Part I: How Migration Experiences Cross Generations and Borders

司会：李 洪章 LEE HongJang (神戸学院大学)

コメンテータ：孫 片田 晶 SOHN KATADA Aki (京都大学 非常勤講師)

### ◆部会のねらい

本部会では、中国帰国者・在日台僑・在日朝鮮人の経験と実践の記述に取り組む次世代研究者3名の報告を通じて、日本帝国をめぐる移動の記憶が、世代や境界を越えて、子孫・家族・親族によっていかに経験されるのか、またそれがポジションナリティとアイデンティティのあり方をいかに規定しているのかについて考える。「二世以降」のエスニシティ／ナショナルティ

を捉える際、居住国における統合と排除のあり方に注目するだけでは不十分であることは、還流や（一時的）帰還といった移動現象をみても明らかである。それに対し、移民研究領域においては、祖国をめぐる政治的葛藤や国際関係、トランスナショナル・ネットワークの存在、「混血」と文化混淆、グローバリゼーションの進展、社会移動との交差性など、様々な文脈をふまえた研究がなされるようになりつつある。本部会を通じて、日本帝国研究におけるトランスナショナルかつ複眼的なアプローチの可能性と展望について考えてみたい。

## ◆第一報告

山崎 哲 YAMAZAKI Satoshi (一橋大学・博士課程2年)

中国帰国者アイデンティティは世代を越えるか—三世の語りを中心として

Can the Identity of “*Chugoku Kikokusha*” Cross Generations?: Focusing on Narratives by the Third Generation

本報告の目的は、中国帰国者三世が祖父/祖母の中国「残留」経験をいかに継承しているのか、また、世界大戦・「残留」・国際移動経験といった家族史がどのように三世の人生に影響しているのかを検討することにある。中国帰国者とは中国残留孤児・婦人等とその家族を指す。1945年の「大日本帝国」崩壊後、旧「満洲国」から日本へ引揚げるのできなかった日本人は中国残留孤児・婦人等と呼ばれる存在となり、日本においては1980年代以降、主にマスメディアを通して集合的記憶が形成されていった。だが戦後から75年が経つ現在、中国残留孤児・婦人等の記憶は日本社会から徐々に薄れつつあり、それは、中国帰国者家庭においても進んでいる。「満洲国」のあった場所は、日本国外である。このことが、「満洲国」や中国「残留」などにまつわる事象について、国家や社会による記憶の継承を困難にしている。

社会からの記憶の忘却が進行するなか、かつて存在した帝国を生きた人々の記憶は現在において当事者家庭でどのように継承され、個々人の人生に影響を与えているのか。一世二世の多くは中国からの国際移動経験を持ち、それは本国帰還および移住として経験された。三世においても、中国から親族とともに日本へ移住した過程やその後の日本での生活や修学にまつわる事象が従来論じられてきたが、日本生まれの三世の存在はこれまでの中国帰国者像に変容をもたらしている。親世代と異なり、幼少期より日本名を持ち、日本語を第一言語として生活してきたかれらが自身に繋がる家族史を親族から聞き取り、それを継承することは容易ではない。

中国帰国者としての認識は世代を越えるのか。本報告では、一世二世と三世との間における中国帰国者であることの自己像の比較、中国帰国者三世の語りを通して検討する。また、中国帰国者である自己意識を持たずに生きる三世の増加が与える影響についても論じる。

## ◆第二報告

岡野翔太 (葉翔太) OKANO Shota (大阪大学・博士課程3年)

民主化後、日本育ちの二世が語る「台湾」

Narratives of “Taiwan” by the Second Generation That Grew Up in Japan after the Democratization

本報告の目的は、台湾にルーツを持つ日本育ちの二世が、親の台湾での経験と記憶をいかに受け継ぎ、そして台湾の親族との繋がりをどのように持っているのか、またそうした体験が二世の「台湾」に対する見方・考えにどのように影響しているのかを、聞き取りに基づいて検討することにある。ここでの、台湾にルーツを持つ日本育ちの「二世」は、両親のどちらかが台湾人であれば、議論の対象とする。

日本在留の台湾出身者に関する研究は、戦後、「華僑研究」の枠組みのもとで進展してきた。ただ、日本に居住する／していた「華僑」を考える際に重要なこととして、「台湾」の存在をいかに捉えるのかという問題がある。台湾が戦前・戦後を通じて経験した複雑な歴史と「華僑」との関係は、日本在住者を指しての「華僑」という語の意味内容にも少なからぬ影響をもたらした。1945年の日本の敗戦とそれに伴う植民地や勢力圏の放棄と、その後の国共内戦、朝鮮戦争などを経たことにより、

東アジア・東南アジアにおける国籍や地域についてのカテゴリーは揺らいでいた。このような揺らぎは、戦後の各時代における「華僑」の位置づけにも見られる。「二つの中国」との政治的な関係性も、「華僑」という呼称に関する揺らぎの重要なファクターであった。このことは、台湾にルーツを持つ日本育ちの人々について、十分に議論を深化させず来た一要因でもあった。さらに、「台湾」の複雑な政治問題もあり、日本では日本在住の台湾出身者（台湾ルーツ）などにまつわる事柄について、中国大陆出身者と混同されて語られる傾向にあった。かりに台湾出身者の固有の動きに注目されたとしても、当事者の政治的帰属意識や運動について蓄積されている一方で、その生活史に関しては重視されずにきた。

日本で育った台湾ルーツの人々は、親の台湾経験と記憶そして、台湾にいる親族との繋がりを通じて、どのように「台湾」を理解してきたのだろうか。加えて、彼らの居住地である日本の社会や人々が待つ「台湾」への視点や報道（場合によっては研究）、日本育ちの台湾ルーツの人々の「台湾」理解に影響を与えていると思われる。以上の問題意識を踏まえて、本報告では、台湾にルーツを持つ日本育ちの二世の語りを通じて、台湾出身の親・台湾にいる親族そして居住地日本が、二世の「台湾」理解にどのような影響をもたらしているのかについて考えていきたい。

### ◆第三報告

竹田 響 TAKEDA Hibiki (京都大学・博士課程1年)

日本と朝鮮半島に跨る親族の繋がり—在日コリアンからみた「故郷」と「祖国」

Connections of Kinship among Japan and the Korean Peninsula: “Homeland” and “Mother Country” from the View of “*Zainichi Koreans*”

本発表では、第二次世界大戦終戦以前に朝鮮半島から日本の内地に移ってきた在日コリアンが、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に暮らす、国境を隔てた親族といかに繋がっているのか、その実態を明らかにすると共に、世代を越えていかに親族の情報を伝えようとしているのかを考察することを目的とする。

第二次世界大戦の終戦までに日本には少なくとも210万人程度が朝鮮半島から渡ってきた（藤原書店編集部2005）。そのうち9割以上の人びとの「故郷」は朝鮮半島南部（現在の大韓民国）にあり、北部（現在の朝鮮民主主義人民共和国）出身の人びとは1割程度に限られた。しかし、1959年から1984年にかけて行われた日本から朝鮮民主主義人民共和国（「祖国」）への「帰国事業」によって、10万人弱の人びとが朝鮮民主主義人民共和国に「帰国」（菊池2009）し、その結果、親族の離散が大韓民国・日本国・朝鮮民主主義人民共和国の3カ国に広がった。

人びとが親族と連絡を取る中で大きな障壁の一つとなったのが、国籍や家族構成によって適用範囲の異なる、国境を跨いだ移動の制限である。大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の間はもちろんのこと、日本と大韓民国の間、また日本と朝鮮民主主義人民共和国の間でも移動の制限が加えられたことによって、人びとは時々で国籍を選択し、また連絡方法を変化させてきた。加えて、世代を越えてどのように親族の繋がりを継承していくかという点でも、人びとの間に葛藤が生じている。

本発表を通して、様々な制約が課される中で、人びとがいかに親族関係を構築し、またどのような葛藤の中で親族の情報が後世に伝えられているのかを検討したい。

## \*\*\*\*\*第II部会\*\*\*\*\*

### 「朝鮮戦争——『帝国のはざま』で起きたポストコロニアル戦争」

#### Part II The Korean War: A Postcolonial Conflict “Between the Empires”

司会：原 佑介 HARA Yusuke (立命館大学)

コメンテータ：高 榮蘭 KO Youngran (日本大学)

#### ■部会のねらい

近年の日韓関係は、「戦後最悪」という枕詞がすっかり定着してしまった感がある。最近はとくに「徴用工問題」が焦点化し、「日韓 1965 年体制」をめぐる玉石混交の戦後日韓関係論が百家争鳴の感を呈している。ところで、今年 2020 年は、朝鮮戦争開戦 70 周年にあたる。いまだ終結に至っていないこの戦争は、日本列島と朝鮮半島の戦後／解放後関係史の原点であると同時に、戦後日本の「国のかたち」や戦後東アジア体制の形成に根源的な影響をおよぼしたきわめて重要な歴史的出来事である。にもかかわらず、日本では、日本とコリアをふくむ東アジアをめぐる議論の基礎に朝鮮戦争をしっかりと据えようという雰囲気はあまりみられない。

本セッションは、このような現状に対する批判意識にもとづき、朝鮮戦争を、とくに境界的・越境的な人間に焦点を当てて再検討する場としたい。戦後日本社会にとって朝鮮戦争とは、つまるところ、政治においては「天佑」、経済においては「特需」、そして国民意識においては「空白」そのものであった。この「忘れられた戦争」の勃発のわずか数年前まで帝国日本によって「皇民化」され、総力戦に動員されていた朝鮮の人びとのポストコロニアル体験にたいする想像力がすっぽり抜け落ちた「天佑」、「特需」、「空白」。それらの「はざま」には一体誰がいて、何を見て、何をして、何を思っていたのか。「帝国のはざま」で起きた朝鮮戦争を、とりわけメディア・表象的な「空白」を埋めるという観点から、より多角的にとらえなおす。

#### ■第一報告

丁 智恵 CHUNG Jihye (東京工芸大学)

朝鮮戦争報道と占領期日本—映像メディアの分析を中心に

Coverage of the Korean War under Occupation in Japan: Focusing on Non-Fictional Moving Images

敗戦直後、6 年半にもわたる米国による占領を受けた日本においては、占領政策としての「民主化」「非軍事化」の名の下に、積極的に民主主義と平和主義の理想を追求する試みがなされた。その対象は法律・政治・経済面のみならず、メディアとそれを用いた視聴覚教育にも及び、日本人に「民主主義」「平和主義」の理念を広めるために用いられた。しかし 1949 年末頃からは、日本では朝鮮戦争と忍び寄る冷戦の影響により、再軍備について論じられ始め、東アジアの国際情勢が緊迫していく。冷戦の影響は文化や思想にも及び、占領当初は民主主義の理想を目指して改革が進められたメディアも、次第にその争いに巻き込まれていく。

東アジアが大国の冷戦対立に巻き込まれていく中で、「レッドパージ」などをはじめとする、反共主義的な政策が知識人やジャーナリストたちを抑えつけた。しかし、当時の様々なメディア資料からは、その大きな流れに抗い、かつての植民地朝鮮で繰り広げられた戦火に対して問題意識を持ち報道に取り組む姿勢もみられた。そこには、かつての植民地・朝鮮を一方的に「忘却」するのではなく、ポストコロニアルな文脈の中で積極的に「記憶」し歩み寄ろうとしていた痕跡が残されている。

また、植民地期朝鮮や朝鮮戦争にまつわる様々な貴重な記録は、長い間米国やソ連、また日本やヨーロッパ諸国など様々な場所に点在し、冷戦が終焉した 90 年代以降、世界中のあらゆる場所で発見され、近年のデジタルアーカイブ化が進む中で研究対象とすることが可能となりつつある。

本報告は、敗戦直後から占領期終了頃までの日本において、朝鮮戦争がどのような眼差しで見つめられていたのか、近年発見された複数の国家や地域にまたがるトランスナショナルな映像アーカイブを用いて、多角的に検討し、もう一つの東アジア

のポストコロニアルな歴史を考察することを試みる。

## ■第二報告

松平けあき MATSUDAIRA Keaki (上智大学 PD)

朝鮮戦争におけるマイノリティ兵士の従軍経験—ポストコロニアル戦争を象徴するもの

Experiences of Minority Soldiers Who Served in the Korean War: Symbols of Post-Colonial War

朝鮮戦争は戦後の東西冷戦を象徴する最初の戦争と見なされると同時に、日本帝国崩壊後の朝鮮半島における新秩序形成の側面もあった。冷戦という新たな文脈と、日本帝国による植民地支配の終焉からわずか5年というポストコロニアルな状況が交錯したこの戦争には、日本帝国と関連の深いマイノリティ兵士が従軍していた。その例として中国朝鮮族や在日朝鮮人の義勇兵、コリア系アメリカ人、そして日系アメリカ人兵士が挙げられる。本報告では、日系アメリカ人二世兵士を中心とし、それぞれの兵士たちが朝鮮戦争従軍の過程でいかに「マイノリティ」の側面、すなわち自らのルーツやエスニック・アイデンティティと向き合ったのかについて検討する。

日系二世は、第二次世界大戦において一時「敵性外国人」として兵役不適格と扱われ、アメリカ市民でありながらも、戦争・従軍において日本をルーツに持つことの意味と向き合った。朝鮮戦争時には、人種隔離部隊の編成が大統領令により廃止され、日系二世兵士は統合のプロセスにあったものの、戦地では1945年までの日本帝国による朝鮮半島の植民地支配と関係して、北朝鮮軍の捕虜に日本語で通訳・尋問するなど「日系」としての役割も負っていた。かれらは時に戦地で「アメリカ兵」としてではなく「日系」としてまなざされた。

中国朝鮮族、在日朝鮮人、コリア系アメリカ人の従軍経験については研究、作品、自伝等において焦点が当てられてきた。本報告では、これらの人々や日系アメリカ人が従軍において日本帝国の植民地主義の歴史に直面したことを、朝鮮戦争の「ポストコロニアル経験」ととらえる。各グループの歴史的背景や、第二次世界大戦におけるポジションナリティを確認しながら朝鮮戦争における転換、連続性を考え、マイノリティ兵士同士の関わりにも目を向けることで、立体的に朝鮮戦争が持つポストコロニアルな側面を明らかにしていく。

## ■第三報告

原 佑介 HARA Yusuke (立命館大学)

日本語文学に描かれた朝鮮戦争期の朝鮮人越境者—日本人植民者と在日朝鮮人従軍経験者のテキストを中心に

Korean Border Crossers (Marginal Men) in Japanese Texts Written by Japanese Ex-Colonizers and Koreans Living in Japan

「韓国併合」以来、日本人と朝鮮人の関係を根本的に規定していた宗主国臣民—植民地臣民という政治的な不均衡・対立は、帝国日本の敗戦にともなう植民地の消滅によって、少なくとも公式的には解消されることになった。経済的格差や社会的差別などの植民地主義的構造はかなりの部分が存続したが、戦後／解放後の両者は、「民族対立を内包した同一の帝国臣民」という従来の関係から、新しい関係を結びなおす局面を迎えた。ところで朝鮮戦争は、多くの日本とコリアの若者たちにとって、このような新たなポストコロニアルの関係を本格的に結びなおす戦後／解放後最初の機会となった。とりわけ、日本人・コリアンともに、日本共産党を中心とする反戦運動に従事した者と、従軍記者や「義勇兵」として戦時下の朝鮮を実際に訪ね歩いた者の経験が注目される。

本報告では、植民者三世であった村松武司(1924-1993)と、在日韓国人二世(一・五世)の麗羅(1924-2001)という二人の戦後作家の朝鮮戦争体験に焦点をあてる。奇しくも、二人は同年の生まれで、ともに植民地朝鮮で生まれ育ち、かつ「大東亜戦争」に短期間従軍した経歴をもつ。民族的な対立・差異とともにいくつかの注目すべき共通点もあわせもつそんな二人が、敗戦／解放を迎え、ほどなくして朝鮮戦争という戦後最大級のポストコロニアル戦争に遭遇することになったわけである。そのわずか5年前には同じ「帝国軍人」であった二人は、戦後東アジア体制が急速に構築されていくなかで、一方は北を支持す

る共産党員（村松）、他方は南を祖国とする「義勇兵」（麗羅）に変貌していった。「故郷」朝鮮の分断という未曾有の事態を前に、かれらが何を考えてどのように行動し、その経験を休戦後の文筆活動のなかでどのように表現したのかを、おもに両者のテキストにおける（いわゆる「引揚者」をふくむ）朝鮮人越境者の表象の分析をつうじて比較検討する。なお、村松と同じく「党員作家」であった植民者二世の小林勝と、麗羅と同じく動乱下の朝鮮を実際に歩き回った経験をもつ張赫宙の朝鮮戦争関連テキストも参照する。

\*\*\*\*\*第Ⅲ部会\*\*\*\*\*

「引揚げの表象－植民地を故郷とすること」

PartIII Repatriation and Representation: Looking Back on Growing Up in Japanese Colonies

司会：坂部晶子 SAKABE Shoko（名古屋大学）

コメンテータ：西 成彦 NISHI Masahiko（立命館大学）

◆部会のねらい

引揚げという事象は、一般に、植民地としての勢力圏に生活基盤を置いていた宗主国側の人びとが本国へ還される、日本の場合でいえば、敗戦を機に外地と呼ばれた植民地域から母国へと帰還することを意味していることが多い。しかし、引揚げてきた人びとの内実をみても、そこには国家や権力装置ともからまりあう階層差や地域差もあり、また日本に併合されていた朝鮮の人びとが内地まで引揚げるといった状況もあった。さらに、植民地生まれの世代にとっては、引揚げ先の内地、日本は帰還すべき母国ではあっても、自身にとっての「故郷」ではない。

引揚げの表象セッションでは、「植民地を故郷とすること」をテーマに、満洲、台湾、樺太で生まれた植民地二世による文学、あるいは当事者の記憶を扱った映像作品が分析される。そこでは、「祖国としての日本」を素朴にイメージできる人々とは異なる引揚げの経験の持つ意味や、引揚げという現象の表象のされ方、さらに戦後社会における引揚げという移動の意味合いが対象化されると思われる。

◆第一報告

坂 堅太 SAKA Kenta（就実大学）

安部公房『城塞』における満洲表象

The Representation of Manchuria in Abe Kobo's *Jōsai* (The Fortress, 1962)

1951年、安部公房は野間宏の紹介で日本共産党への入党を果たしている。当時の共産党は反米的な民族主義を掲げていたが、安部もまた「民族芸術建設の戦士の一人をもつて任じている」と表明するなど、ナショナリズムを肯定的に捉えていた。しかし党との蜜月関係は1950年代後半には終りを告げ、1961年には除名処分を受けるに至っている。そして除名処分の前後から、安部はナショナリズムへの果敢な批判を展開し始めていく。注目したいのは、国民国家の「定住者中心主義」への不信に貫かれたその議論の根底には、旧満洲での植民者体験が存在していたことである。旧植民地出身者による国民国家批判としては1970年前後に登場する五木寛之など「外地引揚派」と呼ばれた作家たちの存在が思い浮かぶが、そうした議論を先駆的に展開したのが安部公房だった。

では安部の中で、旧満洲の記憶とナショナリズム批判とはどのように結びついていたのか。また、そうした批判が共産党除名処分後に浮上したことは何を意味しているのか。本報告ではこれらの問題を考えるために、1962年に発表された戯曲『城塞』を取り上げたい。戯曲の中心となっているのは、戦時期の旧満洲で国家権力と結びつくことで莫大な財をなした父と、戦後、そうした父を憎みながらも同様の手法で成功を収めてしまった息子との対立である。安部はこの作品のテーマを「階級性という問題」と「国家あるいは民族という問題」であったと説明しているが、「階級性」と「国家あるいは民族」の結節点と

して、植民地支配の問題が選ばれたことは重要である。作品冒頭に登場する東京裁判のイメージや、旧満洲国崩壊の日を再演する〈儀式〉が意味するものについて、同時期の安部のナショナリズム批判を補助線としながら考察していきたい。

## ◆第二報告

野入直美 NOIRI Naomi (琉球大学)

“湾生映画”にみる植民地二世の記憶と表象

Memory and Representation of the Colonial Taiwan's Second Generation: Focusing on “WANSEI-Movies”

「湾生」とは、およそ20万人と推定される、日本植民地時代の台湾で生まれ育った日本人を意味する。そのほとんどは、日本帝国の崩壊によって日本に引揚げた。

「湾生」という言葉は、日本植民地時代から戦後にかけて、「日本を知らない植民地生まれの日本人」などの軽侮を込めた呼称として用いられることがあった。しかし近年、「湾生」を主人公とするドキュメンタリー映画が、まず台湾で、次いで日本で制作され、日台の各地で上映され、高い評価を得たことで、「湾生」の社会的位相は大きく転換してきた。

この報告では、『湾生回家』(2015年台湾: 黄銘正<sup>ホアン・ミンチエン</sup>監督)、『心の故郷〜ある湾生の歩んできた道』(2018年日本: 林雅行監督)、ならびに『心の故郷』の姉妹編である『湾生 いきものがたり』(2019年)の三作品を<湾生映画>としてフォーカスすることによって、戦後における「湾生」の社会的位相がどのように成り立ち、変容してきたのか、映画という表象の中で「湾生」の人びとはどのように位置づけられ、いかなる役割を期待され、その「記憶」はどのように描かれてきたのかを論ずる。さらに、「湾生映画」による表象がフレーム外に置いてきたものについて考察し、植民地台湾の記憶をめぐるアクターとしての「湾生」を明らかにする。

## ◆第三報告

ニコラス・ランブレクト Nicholas LAMBRECHT (大阪大学)

李恢成の初期作品を通して引揚げ文学を再考する

Rethinking Repatriation Literature Through the Early Works of Ri Kaisei

「戦後引揚げ」という言葉は「第二次世界大戦後、日本人が(多くの場合、悲惨な体験を経て)日本という故郷に帰る」の意味を表すことが多い。しかし、終戦後に日本人でない人達が日本へ「引揚げる」ケースもあった。本報告は樺太で生まれた作家李恢成の初期作品を手がかりに、戦後文学の中で表される国籍を超えた「引揚性」とともに、引揚げ文学の範囲を考察する。まずは李恢成の家族が樺太から日本へ「引揚げる」までの帝国のはざまを生きる経緯を振り返り、その経緯で明らかになる日本帝国の植民地主義と脱植民地化に伴った国家と移民の力関係の特徴を突き止める。次に戦後日本を生きる在日朝鮮人家族の家庭内関係を描いた群像新人文学賞作「またふたたびの道」(『群像』1969年6月号)の当時の評価を踏まえ、作品が表す戦後引揚げの絶えない影響に焦点を当て、李恢成が表現した現在にも引揚げが起こりうる可能性のある世界を読み解く。さらに李恢成が芥川賞を受賞した同月に発表された、書き手の在日朝鮮人が戦後にサハリンで留まった従弟へ手紙を書く形式を利用した書簡体小説「私のサハリン」(『群像』1972年1月号)を取り上げる。「私のサハリン」の書き手は主に戦時中と終戦直後のサハリンの思い出を自伝的に記述するが、李恢成がこの構成を通し戦後の脱植民地化と戦後引揚げがまだ完結していないことを強調していたことを明らかにし、その意味を分析する。最後に、引揚げ文学の中の李恢成の立場を考慮する。李恢成の引揚げ文学は過去の出来事だけに視線を向けたものではなく、常に将来にまた移動する可能性があることにも向けられている特徴を持つと指摘する。

\*\*\*\*第IV部会\*\*\*\*

「境界を生きる、境界を考える」

PartIV: Living the Border, Thinking the Border

司会：八尾祥平 YAO Shohei (日本学術振興会 PD)

コメンテータ：玄 武岩 HYUN Mooam (北海道大学) 福本 拓 FUKUMOTO Taku (南山大学)

◆部会のねらい

人の移動を主題とする研究は、1990年代の冷戦崩壊後のグローバル化の進展とともに発展してきたことはあらためて言うまでもないだろう。2000年代に入った頃から、旧日本帝国が崩壊し、新たに冷戦体制が立ち上がったことに端を発した「境界」を主題とする研究の蓄積が進み始める。

こうした研究が進展した背景には、台湾・韓国といった旧日本帝国と冷戦体制の「境界」に位置づけられた地域が民主化し、冷戦期のアーカイブスが新たに公開されたことを忘れてはならない。東アジア・東南アジアにおける境界研究は、戦前から戦後にかけて常に大国の〈はざま〉として位置づけられた地域の民主化の成果である。

本部会では、東アジア・東南アジアにおいて「境界研究」を、国家ではなく、人々に注目してリードしてきた研究者たちにあらためて〈境界〉とは何かを報告していただく。国際関係論や地域研究などでは、国家を主体とした分析が主流であるものの、こうした、「まず、国家ありき」の視点から離れ、人々がいかにして国家が〈境界〉を引くことと表裏一体となった排除と包摂による〈はざま〉の空間をつくりかえようと試みたのか—こうした試みが必ずしも成功する訳ではないにせよ—、これがセッションによる報告の「通奏低音」となっている。

本セッションでは、八重山・対馬という境域の比較を行う上水流報告、韓国人の夫とともに韓国へと「帰国」した日本人妻とその家族を取り上げた朴報告、日本と旧満州で暮らすコリアンをめぐる課題を論じた権報告、そして、戦前から戦後にかけて台湾・沖縄といった複数の地域をアメリカ人がいかに認識していたのかを取り上げた泉水報告の4つの報告から構成される。

こうした構成からもわかるように、本セッションは、旧日本帝国の崩壊とその後のような単一帝国の視座ではなく、旧日本帝国崩壊とパックスアメリカナの時代の到来という複数帝国の視座から東アジア・東南アジアの冷戦期を問い直す試みである。これまで、旧日本帝国という枠組みをベースにした議論を見直し、境界研究を新たに展開させる足がかりとしたい..

◆第一報告

上水流久彦 KAMIZURU Hisahiko (広島県立大学)

八重山・対馬にみる 〈境域〉 研究の課題

Issues of “Border” Studies from the Perspectives from Yaeyama and Tsushima Islands

境域とは複数の中心に対峙する場であり、国家の枠組みを越える試みがなされやすい場である。かつ、代替不可能な「場所」として異なる人々がそこを共有し、近代的な「空間」の論理が適用される場でもある。このような境域では次のような課題が存在する。

八重山と台湾東部の境域では、空間と場所の緊張が複数のアスペクト（ここでは領土問題と経済的問題）で異なる様相を示し、かつ各アスペクトが連関していなかった。例えば、台湾東部の漁民は尖閣列島及びその周辺を過去漁に出た場所として認識し出漁するが、その場は石垣市にとって領土という空間でしかなく、台湾人の操業は許されない。一方で、八重山側は頻繁な往来があった「場所」の記憶から観光や経済的取り組みを進めようとするが、台湾東部の市民にとって越境の歴史はなく、国境は揺るぎなく存在した。このような空間と場所の錯綜したせめぎ合いは、境域研究の独特な課題である。



また境域では「中央」への反発や独自性の強調と、「中央」の内面化が併存し、鋭く対立する。例えば、対馬では韓国との関係で「島は島なり」の在り方を模索する一方で、日本の周辺に位置するゆえに「対馬は日本だ」と韓国人観光客の多さへの対抗の中で語られる。八重山では台湾との交流や交易の希求から自己の独自性や周辺からの脱却が試みら一方で、遅れた台湾との対比のなかで日本の一部であるという「中央」への同化も行われる。台湾や韓国は「中央」へ対抗する資源であり、「中央」と自らが同じであることを確認する資源でもある。このような矛盾する在り方は、取り込む外部がない地方（例えば、広島）にはない。

八重山と対馬の住民は国家の枠組みに捉われない地域の価値観で相手先との交流や交易を行っていた。だが、反日韓国像と親日台湾像という国家間の関係が影響をしていた。「地域で」という志向が国家に絡めとられていく様相は、脱国家的試みと国家の関係を考察する点で境域研究の課題である。

## ◆第二報告

朴 裕河 PARK Yuha (韓国・世宗大学)

越境をめぐるポスト帝国・植民地のジェンダー・ポリティクスー日本人妻とその家族をめぐる

Transborder Gender Politics in Colonial Chosun and its Aftermath-With a Focus on Japanese Wives and Their Families

戦後も韓国に残ることになったいわゆる「在韓日本人妻」の多くは、留学や徴用などで「内地」に来ていた朝鮮人と結婚し敗戦直後に「帰国」する夫に伴われて韓国へ渡った人々である。彼女たちを結婚に踏み切らせたのは（恋愛を除けば）多くは家族や親せき、村の有力者などであったが、そうしたケースはどちらかというと徴用者など下層階級の縁組だった。お金で朝鮮人に売り渡された場合もあり、戦場ではない後方の「妻」の座とはいえ日本人男性のために動員された朝鮮人慰安婦の対極点におかれた存在でもあった。しかし 韓国の「本妻」たちや日本の家族たちは既得権に安住し、周辺部に追いやられた日本人妻たちに居場所を与えることにともに消極的だった。結果、彼女たちとその家族は貧困と差別に苦しめられ自己監禁の状態におかれ、社会的自殺をもさせられることになる。

一方、日本への再引揚げも、韓国の籍からも実家の戸籍からも排除されまならぬケースが多く、本土の「戸籍」「国土」中心主義は彼女たちや子供たちを二重国籍者や無国籍者や私生児にした。いわば公式の引揚げから漏れた遅れての引揚げ者たちが、引揚げ以上に可視化されなかった可能性を示す。

女性たちにかぎらず朝鮮への「出国」（帰国）が喜ばれた朝鮮人夫たちも、妻と一緒に日本に帰ることは難しく、いわば逆ジェンダーポリティクスは男性にも機能した。そうした排除と抑圧は国籍法や入国法など、「法」の名前で行われ、帝国の都合よく適用された「法」のために家族と離れ離れになって寂しく死んでいった朝鮮人男性もいた。妻とともに韓国に生きることを選択した人々も帝国成立後も移動しないで済んだ定住者たちによって階級化され、犠牲者となる場合が多く、こうしたことは近代国民国家を支える家父長制を共有しつつ自らをも抑圧していた 帝国と植民地のジェンダー化された構造をみせつけている。

## ◆第三報告

権 香淑 KWON Hyangsuk (上智大学)

解放以降における在「満」／在日朝鮮人社会の跨境的諸相—包摂と排除の〈あいだ〉

Transborder Aspects of Korean Society in “Manchuria” and Japan after Liberation: Between Inclusion and Exclusion

大日本帝国による朝鮮半島の植民地支配は、在満／在日朝鮮人社会の形成を枠づけてきた。それは、帝国史上、初めて在日朝鮮人に対する政策を方向付けたと言われる「朝鮮人移住対策の件」（昭和9年10月30日に閣議決定）によって示されたと言っても過言ではない。この閣議決定では、増え続ける日本への渡航者を減らすために、「朝鮮内に於いて朝鮮人を安住せしむる措置を講ずること」（1項）を定め、「朝鮮人を満洲及び朝鮮北部に移住せしむる措置を講ずること」（2項）などが規定さ

れた。すなわち、朝鮮人の日本への移住を抑え、満洲へと促す「換位政策」が施されたほか、この相互に連なる政策の結果として、解放までにそれぞれ約200万人が満洲及び日本に居住する植民地ディアスポラとなった。

これらの両社会に関する研究蓄積は少なくない。その特徴とは、端的に「在満」「在日」といった呼称にも表れているように、一部の例外を除いては、基本的に中国もしくは日本の国内枠組みが重視され、地域間関係に局限される形で研究が行われてきたことにある。例えば、戦前における統治の実態を探るための政策および歴史研究や、戦後の帰還や残留を捉える研究がそれである。ただし、移民社会を語る際には、朝鮮半島と満洲または日本を繋ぐ移民ネットワークや跨境的な生活様式を捉える視点が不可欠であり、それらを捨象することで本質を見誤る可能性も否めない。何よりも、朝鮮半島からの移住者によって形成された両社会については、当事者による脱領域的な紐帯の形成を踏まえる必要がある。

このような問題意識にもとづき、本報告では、大日本帝国の崩壊に伴う朝鮮人の帰還と残留をめぐる先達の研究を参照しつつ、解放以降における両社会の諸相について論じる。とりわけ、朝鮮半島および両社会をまたぐ跨境生活圏が、如何に変容し、また断絶を強いられたのか、さらにはその後の国民国家（分断国家）の編成や国際関係の再編に、如何なる形で組み込まれていったのかを問う。これは戦後の東アジアにおける国民国家の境界化（包摂と排除）をめぐる論点でもあるが、従来の研究が問うてきた治者を主語とする脈略だけに留まらず、一連のプロセスを通じた被治者および当該社会との相互作用、言わば〈あいだ〉を議論の俎上に載せ、東アジアが絡まり合う関係性のなかで立体的な諸相に迫る試みである。

#### ◆第四報告

泉水英計 SENSUI Hidekazu (神奈川大学)

米国人歴史家の生きた東アジアの境界領域—ジョージ・H・カーと台湾・沖縄

*The Life of an American Historian in the East Asian Frontier: George H. Kerr and His Works on Taiwan and Okinawa.*

20世紀前半の東アジアでは、日本帝国の膨張と、敗戦によるその縮小に連動し大規模な人口移動が起こった。この人の流れをみる一つの視点として民間の米国人という視点を提示してみたい。その理由は、第一に、この視点が一国史的文脈をおのずと越えるからである。日本帝国に取り替わり覇権を握ったのが米国であり、米国の視点からは日本の勢力圏内の諸地域は一連のものであった。したがって、日本内地と個々の植民地との往還を越えた複数地域の連関は、その視点に所与のものとして組み込まれていた。第二に、「民間の」と断るのは、具体的な移民や引揚げ者に焦点をあてる社会史的研究に本論の考察を接続したいからである。戦後の人口移動に枠組みを与えたのは米国の外交政策であるが、政府中枢の人々は、移動する人々と直接に交わることはなかった。これに対し、民間の米国人は、国際関係に翻弄されみずからも移動しながら、移民や引揚げ者と出会い、別れ、そして再び邂逅することになった。交替する二つの帝国の端境期を中心に、等身大の人生の交差を描くことによって、帝国のはざままで生きた人々の実像に迫ってみたい。

本論で取り上げるジョージ・H・カー（1911-1992）は、国際文化振興会の斡旋で来日し台湾総督府の学校で教師をしていたが、日米開戦の前年に帰国、陸軍で台湾情報の収集にあたり、海軍では台湾侵攻時の民事作戦計画を指揮した。国民党の接収に伴って台湾に戻るが、旧知である台湾人に同情し二二八事件へ米軍の介入を画策して追放された。この間、在台の日本人や沖縄人とも旧交を温め、窮状に陥った沖縄人引揚げ者の救済にも動いた。1950年代にカーは在沖米軍のために琉球史を著す。さらに文化財保護にも尽力するが、彼の琉球文化の評価は、台湾帰りの日沖学者の影響を受けたものであった。1960年代には彼は台湾史の著述を始め、台湾に固有の集合的アイデンティティを一貫して主張した。その孤独な晩年を支えたのは、米国に移住した台湾人の教え子や亡命した台湾独立運動家、ハワイの沖縄系移民たちであった。